

生徒の “わくわく” 感を引き出す授業づくり

1. はじめに

「脳に汗をかいた充実した一日だった」

校内研修会を終え、中嶋先生を広島駅にお送りした後に、一番に頭を過った言葉です。前日の打ち合わせでお会いしてから、脳みそがフル稼働し続けていました。それは自分自身が主体的に行動を起こしていたからに他なりません。心地よい疲れ（脳の疲労）の中で、研修会での学びを噛みしめています。

2. 授業参観を通しての学び

今回の研修会で最も美味しいところをいただいたのは私です。午前中4時間中の3時間を中嶋先生とご一緒し、「ライブ」で授業分析を聞かせていただきました。研究主任の特権です。それは、参観させていただいた授業の授業者に、責任を持って「返す」責任が伴うものです。

中嶋先生は、「ここ！」というところで声をかけてくださり、

「今のところ、どう思われましたか？」

「生徒の主体性を育むには・・・」

と問いかけたり、見取り方の視点を伝えてくださったりしました。また、

「学習指導要領をどこまで理解しておられるのでしょうか・・・」

「生徒のつぶやきを拾ってイメージするのに、つながないと・・・」

など、先生ご自身がつぶやかれます。その数々のことばを、「一つも漏らすものか」とつぶさにメモすると同時に、頭に叩き込みました。

以下に、参観の際にいただいた「授業づくりの視点」(□)と私が「ハッ」とした中嶋先生のお言葉(■)の二点を紹介させていただきます。

一点目は「授業づくりの視点」です。各項目において、「どう考え」、「何をすればいいのか」が見えてきませんか。

生徒理解

- 子どもの中に入り、声を拾う
- 子どもの言葉に共感する先生の温かさが必要
- アンケートで子どもの実態（興味・関心・習熟度）を把握する
- 授業中の発問・活動を自分ごととできるように実態把握をする



単元構想

- 目的と到達目標を個人レベルに落とし込む
- 単元構想のときに、活動に目的を持たせ、意味づける
- ゴールから逆算する
- 情報カードを活用する
- 成長を自覚させることができるような授業構成にする
- 授業をストーリーにする

課題設定・活動

- 全国学テの問題に対応できる活動（授業）にする
- 内容の広げ方をもつ
- 作品を作る際には、生徒がエピソードや思いを語るができるようにする（最初に書くようにすることが肝心）
- 生徒の「構成力」「デザイン力」を磨く
- 課題はチャレンジングなものにする
- 最初に「ハッ」とさせる
- 知りたいと思わせる
- デジタル教科書はでき上っているものだから、生徒はイメージできない（PPT 使用が効果的）
- 生徒が目を皿のようにして見る視覚教材を提示する
- 専門性を発揮して、素材を教材にする

ふり返り

- 単元を見通すために、単元すべてが記載できるふり返りシートにすること
- 単元構想を長期・中期・短期と見通すために、ふり返りシートに日付も記入して生徒に配布する
- イメージが分かるように、ふり返りシートに制作過程が分かる写真をつける
- 生徒に尋ねて答えさせているようで、教師がすべて解説してはいないかを検証する

見通し

- よいモデル（クラスメイトをメンターにする）を示すことでポイントを示す
- よいモデルを見せるのは視野を広げるために行う
- 練習のときに起きる生徒の気づきが、その後の自己更新につながる

その他（学習指導要領・思考ツール・協働性）

- 学習指導要領に出ている「情報を整理する」とは、各教科の授業でどうすることかを考える
- 「概念形成」を行う
- 生徒が作成物を作る際には、マッピング・マンダラートを活用して分析する
- グループでいいと思ったものを取り上げる

二点目では、具体的な指導に加え教師理念として大事なことが見えてきます。中嶋先生語録@美鈴が丘です。

- 生徒の学力が低いのではなく、正しい指導になっていない。昔の教え方のまま教えておられる。
- もっと生徒たちは声が出る。
- デジタル教科書だけを使って授業を進行すると温かさがなく感じられる。生徒のことを思った授業をつくらうとしている先生は手間暇をかけた工夫をしておられる。
- あるものをそのまま使って説明するだけでは、苦手な子は分からないのです。
- なぜそうなるのか、考え方を説明できる力をつけることが必要なのに、どんな力をつけるかが見えておられるのか。
- 生徒の納得を引き出す授業にする。
- 学習指導要領の「情報を整理」から、どういうことができればいいのか明らかになっていますか。
- 仲間の良さに気づけることが宝。それをシェアする。教師が拾い上げることで、良さを見つける視座（観点）を示すことが子どもの視点になるんです。
- 人間の脳はつながりや伏線回収があると活性化します。
- 見通しを持った指導とは、前の活動が意味を持つようにつないだ指導のことです。
- 何ができるようになればそこに到達できるかを吟味することです。
- こだわりがあるから語れるんです。
- 教師が生徒に見通しを知らせると、生徒自身が見通しを持つことができます。
- ゴールを教師が持つことで、生徒がゴールを認識します。それらのねらいは学習の始めに伝えることが大切。
- 授業のルールも4月最初に伝えることが大切。見通しを付けると主体性を持つことができます。

中嶋先生からいただいたお言葉（ご指導）は多岐にわたっており、簡単にまとめられるものではありませんが、校内で行う重点取り組みとして、以下の取り組みを行うことを提案します。

それは、まさに「AAR サイクルを取り入れた学習者ファーストの授業づくり」です。そのために、教師自身がAAR サイクルを回していくことを実践し、生徒たちの内発的動機付けの向上につなげます。

①Anticipation

教師が単元構想・令和型学習指導案により綿密な計画を立てることにより、見通しを持つ
→生徒がわくわくするような見通しをもつことができる・主体性を育むことができる

②Action

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の往還の実現に向けた授業改善を行う
→生徒が学びの主体となり自ら学ぶことができる

③Reflection

授業づくりの視座に基づいた毎時間の授業のふり返しを行う
→言語化によるふり返しによってメタ認知力を高めることができる

3. ご講演を通しての学び

150分のご講演で、中嶋先生は終始、私たちを「ワクワク」「ドキドキ」の世界へ誘い、「知りたい」「やってみよう」から「できるようになりたい」と思う気持ちにしてくださいました。

中嶋先生のご講演を内発的動機付けの観点から振り返ります。

(1) 生徒の「わくわく」を引き出す土台づくり

私たちが授業を行う教室は生徒にとって、心理的に安心安全な学習環境となっているのでしょうか。「わくわく」を引き出す一番の土台は、「集団づくり」です。中嶋先生は、「生徒理解」「共感」というキーワードを通し、いかに生徒と教師が良好な関係を作るか、そして協働的な学びを通して生徒同士の関係性を育むかを示してくださいました。「集団づくり」のために大事なポイントを三点挙げます。

第一に、教師集団の意識統一です。目指す生徒像と学習規律を共有し、ブレなく一枚岩になって生徒と関わることが、生徒との信頼関係を醸成します。これは「縦系の指導」です。

二点目は、気づく目を磨くことです。教室で起きている事実に向け、生徒の実態を把握し、教科書という素材を教材にするためのアンテナを高く張ることが必要です。

最後は、積極的な関わりの中で、もっと生徒との関係性の構築を図ることです。生徒の意欲を刺激する声掛けや、活動中の彼らの声を拾いながら他の生徒につないだり、意味づけたりすることです。二点目と三点目は「横系の指導」になります。

私たち教師は、「縦系の指導」と「横系の指導」をバランスよく行う必要があります。参観では、4月に校内で統一した学習ルール（アイコンタクト・ヘソコンタクト・授業道具の置き場所など）も不徹底な授業が見られました。縦系が張れていないのです。年度当初に伝えておきながら言いっぱなしという教師の不誠実な振る舞い（言ったこと確認をしない・教師が実行していない）が、生徒からの教師に対する信頼を失うことにつながります。ルールを大事にしない集団では、安心して過ごせる教室文化が醸成されません。

また、生徒の言葉に反応している先生もおられました。個の対応で終わってしまいました。横系が通せていない状態です。だから、「●●さんが、こんな考えを持ってるよ。どう思う？」などの他の生徒につなぐ一声をリアルタイムで出すことが、いい言葉や主体的な行動を歓迎する集団づくりに一役買うことになります。こうした教師のつなぐ「声」こそが、生徒の気づきや自己選択を促す「ナッジ」です。

中嶋先生のご講演では、実際に発問で意識喚起を促したり、会場の掲示物を取り上げて伝えたいこととリンクさせたりしておられる場面がありました。また、午前中の授業中の先生方の所作と午後からのグループワークでの振る舞いもつなげて、わたしたちが「ハッ」とする状況を作り出しておられました。それらはすべて中嶋先生が打たれた布石です。実際にこのようにしたらいいのだと示してくださいました。

私は研究主任の立場として、日頃の職員室での会話や研究通信を通して自己診断を促す機会を作り、定期的な授業参観を続けていきます。そうした中で、当たり前前かがみのことが当たり前前かがみにできる教師集団となり、生徒が主体的な学び手となるように浸透させます。

(2) 生徒の「わくわく」を喚起する

「生徒の本当の主体性は、授業内容の豊かさや教材の魅力で引き出されるもの」と中嶋先生はおっしゃいます。私たちは、生徒の知的好奇心を満たし、心から楽しいと思える授業をしているのでしょうか。

今回の研修でフォーカスしていただいたのは、単元構想です。本校の校内研修では、今年度、令和型

学習指導案を使い研究授業を行います。中嶋先生には、昨年度も二度校内研修会に来ていただき、私が令和型学習指導案で公開授業を行いました。しかし、校内研修会で他の先生方が書かれたのは1時間のみの指導案でした。

そこで、自分が令和型学習指導案を書き見えたことや、授業に臨んで得たことを先生方にも実感していただきたくための取り組みを仕掛けました。常に「単元終末に子どもたちがどんな姿になってもらいたいのか」、「何ができるようになってもらいたいのか」をイメージし、単元構想を練り上げることは簡単なことではありません。しかも、ストーリーになるようにつなぐことは気の遠くなるような思考が必要です。そこで、百聞は一見に如かず。先生方に体験していただきました。

実際に情報カードに書き、紙芝居のようにしてグループの先生方に伝えていきました。

「自分が考えたのは全く面白くないですね。紙芝居にして伝えたらそう思いました。」

と言われた先生がおられます。これは、実際に体験してみて、初めてご自分のことを客観視できたということです。私たち教師は、本当は自分自身でセルフモニターをし、授業でも生徒の実態によって修正をかけていく力を身につけておく必要があります。それが教師に必要な「メタ認知力」です。

さて、この先生はその後どうしていると思われませんか。



次に、生徒の「わくわく」を喚起するポイントを三点に絞って確認します。

一点目は、授業で行われる活動や扱われる内容を、生徒が「自分ごと」に捉えることができるように、教師が仕掛けることです。例えば、漠然と「ポスターを作ります」ではなく、生徒が「何のために」「誰に向けて」を明確にすることや、トピックの何が身近なのかをマンダラートで分析することを通して「自分ごと」化させることができます。さらにこうした教師の仕掛けが「個別最適な学び」の道しるべにつながることは言うまでもありません。

二点目は、知的好奇心をくすぐる仕掛けをすることです。仕掛けとして、例を見せるときにただ並べて示すのではなく、比較したり、理由を考えたりする場面を作ることが考えられます。また、生徒が自分の考えを持ち、他者と交流したくなるような「ハッ」とする発問も仕掛けとなります。生徒が知的好奇心を感じるのは、自分が持っていない仲間の考え方に触れたときだからです。

最後は、授業構成です。肝心なのは、「ストーリー」することです。単発のつながりのない活動の羅列は意味を成しません。

「脳はつながりのあることしか記憶しない」

と中嶋先生は言うておられます。例えば、活動を行ったら次にそれを活用して出力するという流れにすることでつなげることができます。さらに、なだらかなスロープのような「ストーリー」をイメージしたフレームワークにすることが、生徒の負担を軽減し、「わくわく」を喚起していく源になります。



(4) 生徒の「わくわく」を維持する

「脳は自分がいつも考えていることを実現する」

「人間の脳は、その人が考えていることを、その人が望んでいると考えて、その人の考えや習慣を保持しようとする」

研修を受けながら中嶋先生から以前いただいたお言葉を思い出していました。生徒の「わくわく」

を維持するポイントが、このメッセージにあったからです。つまり、「わくわく」を維持するには、生徒が主体的に目標（「見通し」）を持ち、納得して自己決定し、実践しことを繰り返る」流れを作ること、すなわち生徒自身が「AAR サイクル」を回すことができるようにすることです。

それを可能にするために、本研修の内容をふまえて、授業での実践のポイントを二点に絞って挙げます。

一点目は「見通し」を持つことです。授業の最初に単元ゴール、本時の目的と到達目標を伝え、生徒が「見通し」を持つことができるようにします。単元の最後に行う出力が分かっているならば、生徒はそこに向けて取り組みを始めます。それは、ホール・ケーキのデコレーションをどのようにしようかと構想を練って作り始めるのと同じです。

「授業は、カットケーキ（バラ売り）ではなく、「単元」というホール・ケーキで決まる」

と中嶋先生は言われています。過去の生徒の作品や、仲間の良いパフォーマンスをモデルとして見せることも、「見通し」を持つことの一つです。



二点目は「振り返り」です。単元を通して獲得してきたことが本当にできるようになったかを試す課題に取り組みせ、それを振り返る時間を取ります。その繰り返しが「維持」の肝になります。例えば、単元を見通すために、単元すべてを網羅した日付入りの振り返りシートにしたり、イメージを持つことができるように写真入りのシートにしたりすることで、ゴールを意識した振り返りにしていくことができます。

生徒が自ら行動を起こす自律的学習者として、仲間と共に自己更新を続けることができるようになるために、教師が共感的態度で生徒と向き合い、AAR サイクルを念頭に置いた「正しい指導」をしていきます。教師のそうした粘り強いベビーステップの指導によって、生徒自身もAAR サイクルを回すルーティン構築ができるように。

4. おわりに

「人間というものはお互いに仲よくして、力をあわせていくということで、それが人間の尊厳であり、平和のものであり、美しさだと思います。私はそれを人間尊重といっているわけなんです。」

出光興産の創業者である出光佐三氏の言葉です。彼は、社訓に「人間尊重」を掲げ、「人」中心の経営を貫き通しました。彼の「人」を大事にする姿勢は、中嶋先生と重なります。

生徒、そして関わった人たちを大事にする。「何のため」「誰のため」を問い続け、ブレない軸を持ち邁進していく。私たちもそんな人になれるように、がむしゃらに取り組んでいかなければならないことを再確認することができました。

一人ではできないことを仲間と共に。そんな教師集団になれるように、これからの歩みを進めていきます。

ご多用な中、広島まで足を運んでくださり心から感謝申し上げます。

